

翻訳史料「函館とアイヌ集落」 —明治期来日アメリカ人女性宣教師の蝦夷探訪記—

齋藤元子

1. はじめに

本稿で翻訳紹介する「函館とアイヌ集落」は、1881(明治14)年にアメリカ人女性宣教師メアリー・ホルブルック(Mary Holbrook)によって書かれた蝦夷探訪記 *Hakodate and the Ainos Beyond*¹⁾ の全訳である。ホルブルックは、アメリカのプロテスタント主要教派の一つであるメソジスト監督派教会内に組織された女性海外伝道協会により、1878(明治11)年に宣教師として東京に派遣された。19世紀アメリカのプロテスタント教会は、海外伝道に熱心で、特に世紀後半は各教派内に女性海外伝道協会が形成され、多くの女性宣教師を異教地に送り込んだ。彼女たちは、インド、中国、日本をはじめとするアジア、アフリカの国々において、女学校、孤児院、病院などを設立し、教育や生活の支援を通じてキリスト教の伝道活動を行った(齋藤 1999)。ホルブルックも、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が築地居留地に開設した海岸女学校(青山女学院の前身)の教師として着任し、1881(明治14)年から84(明治17)年まで同校の校長を務めた。

女性宣教師たちは、アメリカの女性海外伝道協会に宛てて、現地の様子を定期的に報告することが義務づけられていた。それらの報告は、協会が発行する機関誌に掲載された。報告の内容は、伝道状況のみならず、その土地の歴史、地理、文化、女性や子供の様子など多彩であった(齋藤 2000: 20-21)。当時アメリカ人女性の多くは、女性海外伝道協会の活動に資金協力をを行い、協会機関誌に掲載された女性宣教師からの報告を通して、海外に関するさまざまな知識を得ていたと言われている(プラング 1995: 6)。

「函館とアイヌ集落」は、ホルブルックがメソジスト監督派教会女性海外伝道協会への報告として記したもので、同協会の月刊機関誌 *Heathen Woman's Friend* (『異教女性の友』) に3回にわたって連載された²⁾。ホルブルックは東京着任以来、

日本を紹介する文章を積極的に書き送っている。「函館とアイヌ集落」前後にも、日本の花々、日光滞在記、関西旅行、浅間山登山、茶の湯などについての報告が見られる(齋藤 2002)。「函館とアイヌ集落」はその中でも、文章量と話題性の点において、最も読みごたえのあるものと言える。『青山女学院史』はホルブルックについて、「報告、手紙、紀行いずれも名文が多く、日本文化に対する理解の深さと正確さは宣教師中随一ではなかったろうか」と記し(青山さゆり会 1973: 36)、彼女の著作に高い評価を与えている。

2. メアリー・ホルブルックの蝦夷探訪について

ホルブルックは1881(明治14)年春、腸チフスに罹り、静養のため同年夏を函館在住の宣教師宅で過ごした。体力が回復すると時間を持て余し、アイヌ集落を訪ねる旅に出る。その様子を記したのが「函館とアイヌ集落」である。この旅がなされた前年の1880年には、英国人女性旅行家イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* が出版されていた。同書は、バードが1878(明治11)年5月から12月までの約7ヵ月間日本に滞在し、東京から日光、新潟を経て、東北、蝦夷を巡り、東京に戻った後、神戸、京都、伊勢などを訪れた旅の記録である。バードの旅の主目的は、蝦夷のアイヌを見ることであった。序文においてバードは、同書の刊行理由の一つとして「エゾの原住民を親しく知る機会をもったから、今まで以上に詳細に彼らの事情を説明できる」(バード 1973: xiv) ことを挙げている。

ホルブルックの旅が、バードの著書に触発されたものか否かは明らかではない。ホルブルックが日本に着任した1878(明治11)年10月21日、バードは蝦夷の旅を終え、関西方面を巡っていた。その後12月19日に離日するまで10日間東京に滞在しているので、その間に二人が直接顔を合わせていたことは考えられる。と言うのは、東京在住のクララ・ホイットニー³⁾ が、蝦夷から戻ったバ

ードと来日間もないホルブルックに教会で会ったことを、日記に書き残しており(ホイットニー 1976: 31, 47, 49), この点から両者がその教会で言葉を交わした可能性を推測できる。

ホルブルックの旅は、バードの旅と比較すると、日程も移動距離もかなり小規模である。しかし、所持品、日本人男性従者の同伴、宿舎や交通機関における特別待遇、乗馬など、いくつかの共通点を見いだすことができる。そして、これらはバードのみならず、19世紀後半のヴィクトリア期に世界各地を旅したレディ・トラベラーと呼ばれる女性たちに相通じるものである。近年の歴史学、地理学などの研究において、レディ・トラベラーの人物像や旅の様相が明らかにされているが、考察の対象はほとんどが英国人女性である(例えば、井野瀬 1998a, 1998b, 1999; Domosh and Seager 2001: 143-147)。同時代のアメリカは女性宣教師を多数輩出しており、彼女たちも女性旅行家と同様に、その大半が中流階級に属する白人女性であった。当時のアメリカ社会は、ヴィクトリアン・アメリカという時代呼称が示すように、英国とほぼ同じ価値観や道徳観念に基づいて、女性の領域は家庭にあるという規範を女性に課していた。したがって、女性旅行家も女性宣教師も、女性の領域を大きく踏み越え、海外という広い世界に飛び出した女性たちであった。ホルブルックの旅にみられるレディ・トラベラーとの共通性は、白人女性が外国で成し得る安全かつ冒険に富んだ旅のスタイルを映し出していると言えよう。

ホルブルックは自らの旅を表わす言葉として、目的意識をもった旅を意味する *expedition* を用いている。そこには、未知のものとの出会いに対する強い期待が込められている。アイヌ集落を訪れたホルブルックは、*study* (学ぶ)、*investigate* (調査する)、*inspect* (視察する) といった動詞に示されている好奇心旺盛な態度で、アイヌの家庭や学校を見学し、その様子を詳細に記録している。「函館とアイヌ集落」は、女性海外伝道協会への報告というよりも、むしろ機関誌の読者であるアメリカの一般女性に向けて書かれたと思われる。前述したように、バードの *Unbeaten Tracks in Japan* が1年前に出版されてはいたが、アメリカ人の多くが既に読んでいたとは考えにくい。ちなみに、機関誌 *Heathen Woman's Friend* では、1883年の6月号で初めて、日本関係の参考文献として、

Unbeaten Tracks in Japan を紹介している。よって、ホルブルックの蝦夷探訪記は、機関誌読者にとって、蝦夷という未知の場所に触れる新鮮で興味深い読み物であったに違いない。

3. 「函館とアイヌ集落」(全訳)

I

函館は東京から約500マイルの所にある。三菱カンパニーの設備が整った汽船で、目的地であるここに約3日間かけてやってきた。町は、“眠る牛”として知られている高さ1500フィートのジブラルタルのような形をした岩山の麓にあり、ゆるやかな傾斜をなして家々や寺院が山腹まで続いている。湾の向こう側には霧の立ち込めた青緑の丘が連なり、その後ろには駒ヶ岳の裸の頂が見える。駒ヶ岳は今は休火山であるが、いつ何時蒸気雲と又状の火柱を上げて再度噴火してもおかしくない様相を呈している。海面は優雅な白い帆船や粗雑な木造の小型平底船、小型汽船で占められている。夏の今、いろいろな国旗を掲げた軍艦で港は一層込み合う。船員たちはしばしの間この北の土地の爽快な空気を吸い込み、普段は静かな海岸は彼らの音楽で活気づいている。

ミスター・ダヴィンソンの家は絵のような切り妻屋根のコテージで、山腹に広がる杉林の真下にある。ベランダは藤棚で日陰が作られ、芝生の庭は今まさにバラとゼラニウムで燃え立っている。それは決して大きな家ではないが、確実にゆとりのある家である。と言うのは、ダヴィンソン夫妻、ミス・ウッドワース、ミス・ハンプトンの住まいであることに加えて、現在私の他に3名の病氣療養者を寄宿させているからである。家は港の美しい景色を見下ろせる場所にあり、横浜から来た汽船がまだ錨を降ろさないうちに、二階の窓より眺められる。東京のジメジメした暑さの中で生活していた者にとって、函館の空気は強壮剤のように作用した。ここにはわずかの外国人しかいないので、古い靴やドレスを全く臆せず身につけることができる。本当にここは以下のような場所である。

命を擦り減らす心配事からしばし逃れられる
ナイルの蓮を食める
中国のポピーの花の香を楽しめる

慣習の重荷を投げ出せる

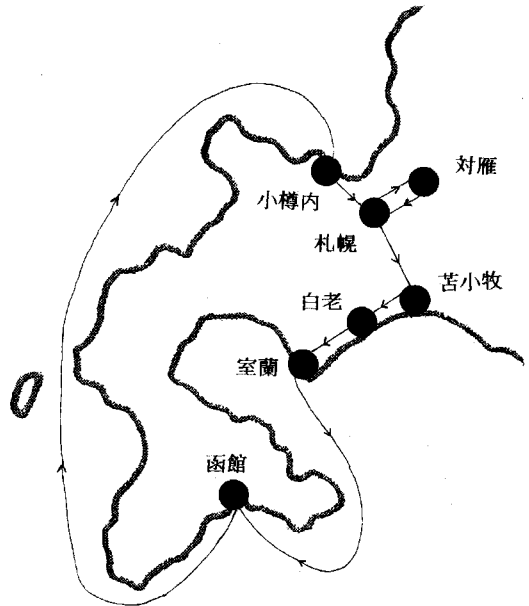
波間に漂う浮草の如く

人間を縛る休みなき職務が一杯に詰まった荷物をしばし海に沈めて

東京を離れる時、金槌の響きがほとんど私の耳にこびりついていた。と言うのは、我々の新しい住まいは、私が旅立つ一カ月前にでき上がると約束されていたにもかかわらず、ぴったりとはまるべき窓が依然ガタガタ鳴り、再調整されるべきドアは依然たわんできちんと閉じなかった⁶⁾。まさに、職人の仕事ぶりには理解しがたいものがあった。しかし函館に来てすぐに私は、木の切れ端と鉋くずにあふれた一つの光景を見て、同じような場所に来たことに気が付いた。なぜなら、この新しい学校と牧師館の設計は完了し、工事が間もなく開始されようとしていたからである。ミスター・ダヴィソンは多くの時間と注意を払って工事を監督しており、キャロライン・ライト・セミナーとミスター・スクワイヤーの住宅は、どちらも低コストで便利な施設を備えた建物の見本となるであろうと確信できる⁷⁾。

ここへ来てしばらくの間は、静かに時を過ごすことで満足していた。裁縫を少ししたり読書をしたり、そしてたっぷり睡眠を取った。回復期の患者がすべきように。やがて体力が回復してくると、私は元の自分に戻ったように感じ始め、登山、洞窟探検、乗馬をしたいという欲望をほとんど押さえられなくなった。徒歩で時には馬やボートで函館をほぼ隅々まで見てしまった後、蝦夷の北部にあるアイヌの村への旅を決意した。ミス・ウッドワースだけが私と一緒に行くことを望んだ。その他の人達は不吉そうに頭を横に振り、馬や沿道の茶店の悪口を並べ立てた。明らかに、我々のような無防備な二人の女性が長い陸路の旅を試みることは極めて危険なことと見なされ、この計画はただの話で終わると皆が確信していた。

我々はパスポートを取り寄せるために東京に電報を打った。しかし来る日も来る日も汽船は我々のパスポートを携えて来なかった。ほとんど諦めかけた時、ついにそれが届いたが、何の詫び状も添えられていなかった。準備の第一段階として、荷物を任せられる適当な男性の従者を見つけねばならない。と言うのは、荷物なしで陸路を旅することは不可能だからである。まず第一に食糧を携



メアリー・ホルブルックの旅のルート（筆者作成）

帯しなければならぬ。日本の食べ物に長く耐えられる外国人はほとんどいないだろう。それから雨に備えての数枚の予備の服、途中の休息中に楽しむための本、そして鞍である。食料は缶詰肉、ジャム、ピクルス、パン、クラッカー、チョコレート。それらをナイフ、スプーン、フォークそれぞれ一本と一緒に一つの木箱に入れ、服と本などをもう一つ同じサイズの箱に詰めた。我々は小さな汽船で沿岸を210マイル北上して札幌へ行き、帰りは馬で戻ることになった。

出発時間が来た時、キュウヅウという我々の旅の従者が、外国製の布地で作られ堅く糊付けされたスーツをきらびやかに身につけて登場し、荷物を船に運び始めた。汽船の船長は、我々を船まで連れて行くためのボートを用意していると、親切にも出発の数時間も前に伝言してきた。そして熟練したボートの漕ぎ手は、すぐに我々を船へと運んでくれた。大変驚いたことに、船長は彼の部屋を我々に使うよう強く勧めてくれた。そのおかげで、立派な太平洋汽船の通常の特等室にいたのと同じような快適さを味わうことができた。夕方の6時頃乗船したが、海は一晚中全く穏やかで、私はあたかも陸の上にいるかのようにぐっすり眠った。船が進むにつれて、空気は冷たさを増した。陸地は常に視界にあり、かなりの雪が山頂に見え

た。

II

5時近くに小樽内⁹⁾に錨を下ろし22時間の船旅を終えた。船長の助言に従って、明るくなるまでは船上にとどまり、朝札幌に向かうことに決めた。船長は我々をボートで陸まで運んでくれた。それから少しの間、街を散策した。小樽内は河岸に沿って伸びる一本の道の周りに家が散在する漁村である。そこは一儲けしようと日本の各地からやって来た人々の盛り場である。巨額の投機が彼らの間を巡り、それはほとんど賭博に等しい。

小樽内と札幌は鉄道で結ばれており、我々は駅に行き翌日の何時に列車が発つかを尋ねた。駅は粗雑な木造の建物で、外観は見苦しくないが、内部はとても粗末で、アメリカ西部諸州の荒野にある新しい駅を連想させる。列車は7時30分に出ると教えられたので、我々は船に戻った。翌朝早めに朝食をとり駅に向かった。ウィルミントンとピッツバーグで製造された客車は、祖国で見られるものと同じであり、列車のベルは本物のアメリカの音がする。日本の鉄道については、英国人の友人からかなりの酷評を聞かされていたが、何の先入観も持たない人は、その目的をかなり満たしていると思うだろう。

札幌までの乗車距離はたった22マイルで、すぐに到着した。札幌はとても興味深い場所である。幅の広い道路を配して街が設計され、いくつかの実に立派な建物もある。そこにはアマーストのクラーク学長⁹⁾によって5年ほど前に創立された農学校がある。我々が訪ねた時、学校は学期中ではなかったが、記念館や農学部やその他の学部を見学してとても満足した。ここの学生の間にはクリスチャン・バンド¹⁰⁾があり、彼らは非常に熱心らしい。今彼らは自ら小さな教会を建設しようと計画し、外国人宣教師団からのいかなる資金援助も受けずに、彼ら自身で牧師の生計を支えたと申し出ている。

ある一日、札幌に短期滞在している他の外国人と一緒に、12マイル離れた対雁¹¹⁾にあるアイヌの村を訪れた。アイヌは読者もたぶん知っていると思うが、日本の先住民と見なされており、日本人との関係はアメリカ・インディアンと米国人との関係に非常に似ている。我々は馬で出発し、約4マイル進むと蝦夷で最大の川である石狩川の岸

に到着した。ここで我々は下馬し、馬とランチの入った籠を別当¹²⁾に預け、小さな丸木舟の底に座り、温厚そうなアイヌとその妻を船頭にして川を下りはじめた。空気はとても心地よい程に冷たい。この季節、川は100フィート以上の幅はなく、川岸より張り出した柳が効果的に日陰を作っている。パラソルはほとんど必要なかった。一艘に3人乗るのが精一杯で、2グループに分かれる必要があったので、二艘の丸木舟がお互いに見える形で航行を続けた。2時間以上我々は夢のように漂った。すべての自然は黄金の静けさの中へ落ち着かされているように見え、我々は時々自分たちの唇がその静けさを破ってしまうのをいやに思ってしまう程であった。

ついに我々是对雁の村に到着した。そこは村とは言うものの、戸数は半ダース以上はなく、それらは草葺きのあばら家にほかならない。この土地の人はほとんどがアイヌで、我々の後をあちこちついて来る一群の子供達は、この一風変わった人種の特異性を学ぶ機会を我々に提供してくれる。彼らの顔の色は、日本人よりも多少浅黒い。髪の毛はきめが粗くほさほさである。日本人の婦人や少女が自分たちの髪を結い方に特別な誇りを持っているのに対して、アイヌの女性はまったく気にかけていないように見える。子供達は樹皮の繊維で作られた一枚の衣服を着せられており、それには彼ら独特の装飾が施されていて、実に可愛い。子供は一人として裸でいるものはいない。日本の夏には、わずかな布さえ身につけていない子供を、よく見かけるにもかかわらず。

対雁には政府の建物がある。日本風のいくつかの部屋から成っており、役人がこの島を旅する際ここに立ち寄る。我々はここで昼食をとることを提案したが、その時まだ11時だったので、ランチ・バスケットをレインコートも中にいれて別当の一人に預け、フェリー・ボートで川を渡り、約半マイル歩いて近隣のいくつかのアイヌの家の調査に向かった。我々は間もなく道路に面した前方に倉のある家の前に来た。これは高名な族長の家である。家は全くの小屋に過ぎず、屋根と側面はすべて草葺きである。それはあまりに古く今にも壊れそうなので、この辺に多い大量の積雪を想像すると、この貧しい家人が一体どのようにして生きながらえているのかとってしまう。正面に一種の玄関があるが、家自体はただ一つの部屋から

成っており、不潔と不便を絵に描いたようである。未加工の板でできた床は粗末なマットで覆われ、中央には囲炉裏となる四角い穴がある。ここで緑の小枝が力いっぱい燃えようと苦闘していたが、煙の雲が部屋の中をゆっくりと立ちのぼるだけで、それもついには屋根の穴を通して外へ出て行ってしまった。火の上には鉄鍋があり、その中には犬の餌を思わせるごった煮が入っていた。そしてクモの巣がからむ棒からは、大きな乾燥物の固まりが吊り下げられていた。クモの巣、埃、鱗、鮭の皮、古い骨、乾燥した食用草、そしてあらゆる種類のゴミや廃物が部屋の三方に並んでいる棚を埋めつくしている。そして残りの一方は粗末なスプーン、やかん、ほうきなどが掛かっている。床の上には、いろいろな種類の忌まわしいもので満たされた桶があちこちにあり、極度に吐き気を催させる光景である。あばら家の中の一角にマットで覆われた一段高い台がある。部屋で唯一の座席がある名誉の場所であり、我々はそこへ招かれた。古老の族長は他の半ダースの男性と火の周りに車座になっていた。族長の妻は列の最後に座り、年老いた母は他の人たちから少し離れていた。族長は非常にわかりやすい日本語を話し、我々の発するどんな質問にもかなり快く答えようとしていた。彼は立派な顔付きをしており、彼の人種の他の人とも共通しているが、内気な子供のような柔らかい声をしている。族長の妻は喫煙し、彼女のパイプは日本人のそれよりもかなり長かった。

アイヌは米を蒸留した強いアルコールの一種である酒を非常に好み、日本人よりもはるかに多く飲む。上唇の入れ墨は女性の間の習慣である。入れ墨は口髭の形に施されるので、彼女たちは男性のように見える。幼い少女はただ唇に黒い縁彫りをつけているだけであるが、結婚すると完全に墨を入れる。アイヌは、いかなる程度においても農耕をしたことがないように見える。小屋の外倉の下にしまい込んである櫛の一つを見た。それはまさにアメリカの小学生が自作した粗末な櫛のようであるが、長めであることと鉄の代わりに鯨の髭で造った滑走板をつけている点が異なっている。これらは複数の犬によって引かれ、一チームは通常6匹から8匹の犬で構成されている。

Ⅲ

アイヌは文字を持たない。しかし多くの子供は

今や日本語を学んでいる。我々は彼らのために政府が建設した校舎を訪問した。残念ながら休みの時期だったので、子供たちがいるところは見られなかった。校舎自体はニューヨークやペンシルベニアの田舎にある多くの校舎よりはましなものである。我々はさらに2、3の家を視察した後、休憩所に戻り腰を下ろしてバスケットを開き、バター付きパン、コールドチキン、鹿の干し肉というおいしい昼食をとった。それからしばらくマットの上で休息してから、馬に乗り家路についた。道路は川堤に沿った乗馬道だけであった。丈のある柳が両側から道に陰を作り、枝が時折我々の頭上で織り合わさり、美しい緑の葉の天蓋を形成していた。小道は立派なシダや笹やぶに縁取られ、時には野バラが縁取る愛らしい土手もあった。日本の馬は、たいてい家路に向かうときには非常に良く走るので、我々は短時間に12マイルを駆け足で移動し、夕食にちょうど間に合っただけで宿所に到着できた。

3日間札幌とその近郊を見た後、我々はそろそろ函館に戻る時であると感じた。と言うのは、我々は陸路で帰ろうと決めていたので、約5日間を要すると予想したからである。札幌から我々の陸路の終点である室蘭までの道の状態は良好で、馬は主要な宿場で常に入手可能である。キュウゾウは馬を数頭雇った。我々が彼に荷物を持って乗るのを期待していることを知ると、キュウゾウはあからさまに不満を漏らした。馬子あるいは先導者が先頭を走り、ミス・ウッドワースと私が続き、荷鞍に乗って両側に荷箱を一つずつ下げたキュウゾウがしんがりを務めた。“蝦夷の這い登り”¹³⁾として知られている独特の足つきで出発したので、我々の列は非常に興味深い情景を作り出していたに違いない。その姿を写真で読者に見せることができたと思う。天候は申し分なく、空は涼しげな灰色の雲に覆われ、馬がもう少しペースを上げてくれさえしたら、さらによかったであろう。しかし風景はいくぶん単調だった。整然とした凹凸のない道が低木や藪の荒地を貫いて伸び、電線が道の片側に沿って通っているのが、目に入るもののすべてであった。時折、雄牛が引くギィギィ音を鳴らす荷車や野生馬のそぞろ歩く群れに出会ったが、人通りは極端に少なかった。昼に路傍の宿屋へ立ち寄り、馬の交換と昼食に十分な時間を費やした。夜にも長旅の疲れを癒し翌日への力を

蓄えるために、再度休息をとった。この沿道の宿屋である茶店の評判は非常に悪く、実際快適とは程遠いものであったが、それでも我々は毎晩なんとか熟睡した。我々が滞在したすべての場所で、ミカドが国中を巡幸する際に、彼とその召使いをもてなす建物が選別されていた。ミカドはもうすぐ訪れる予定で、沿道は彼を迎える準備が進められていた。ほとんどの場合、橋は修理のために閉鎖されていた。ある昼下がり、我々は6本の川、あるいはどちらかと言えば、1本の川を6回渡った。翌日苦小牧という村で昼食をとった。ここを去る時、馬たちは勢よく速足で出発したので、とても気分が良かった。キュウゾウは我々がそのように速く馬を走らせるのを見て、多少恐怖感を抱いたようだが、気のいいアイヌの馬子はそれをおもしろがっていた。

苦小牧からの道は海岸線に沿って走り、白波の怒号が気持ち良い音楽に聞こえる。平地は野生の花々、美しい黄色のユリ、ブルーベル、アヤメ、山アジサイ、初めて見る愛らしい小さな羽毛をもったバラ色の房などに覆われていた。白老で再度、修理中で閉鎖されている橋に出くわした。その川はそれほど大きくは見えなかったので、馬を渡らせるのは簡単であろうと思った。我々は下馬し、馬子がまず彼の馬を先導した。しかし川底は泥状になっており、馬子も馬も危うく溺れるところだった。川の中には人間がつかまれる丸太がいくつかあったが、可愛そうな馬は非常に深く沈んでしまい、そのものがき様は見えていて恐ろしいものであった。ついに馬は堅い地面に到達したが、完全に疲弊してしまっていた。しかし傷を負ってはいなかった。橋は運よく人間が歩いて渡ることにはできた。キュウゾウは我々の手荷物を彼の馬に乗せ、馬子が他の3頭を連れて、より安全に渡れる場所を探して回り道をした。我々は何の問題もなく橋を渡り徒歩で村へ入った。荷物の責任を負っているキュウゾウが馬に乗り先導してくれた。

3日目の午後室蘭に到着した。数マイルに渡って風景は魅惑的だった。左側には長い海岸線が延び、右側には青い山脈、険しい断崖、花に覆われた平地が臨まれた。室蘭は噴火湾の海岸に寄り添うように位置し、とても絵になる村である。我々は汽船が発航するまで2、3日はここに滞在せざるを得ないと予想していた。ところが茶店に落ち着く間もなく、毎夜函館行きの船が出ていること

を知った。そこで慌ただしく夕食をとり、乗船の手筈を整えた。波止場には、すでにみずほらしい包みを携えた日本人を満載した粗末な平底船が待っていた。我々は自分たちの鞍、鞭、荷箱があるのを確認するとすぐに乗船した。なんと小さな汽船であろうか。まるで単なるおもちゃのようであった。どこにも寝台設備はなかったが、我々は二等船室の乗客として厚遇され、うまく細工された柵で船の他の部分とは仕切られた船首の一角に案内された。数枚の赤い毛布が、特別なもてなしのしるしとして提供された。我々はその毛布でできるだけ体を覆い、堅いベンチの上で疲れた手足を伸ばして眠ろうと試み、いつしか眠っていた。翌朝目が覚めると、すでに函館の近くまで来ていた。そして9時半には帰宅し、冒険談に花を咲かせていた。

注

- 1) アイヌはAinuではなく、Ainoと標記されている。これは後に触れるイザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* においても、同様である。
- 2) *Heathen Woman's Friend* の1881年11月号(13巻5号, pp. 105-6)、12月号(13巻6号, pp. 127-9)ならびに1882年1月号(13巻7号, pp. 152-3)に掲載。なお、*Heathen Woman's Friend* は現在、ニュージャージー州マジソンにある General Commission on Archives and History of the United Methodist Church に所蔵されており、一部は青山学院資料センターにもある。
- 3) クララ・ホイットニー (Clara Whitney) は、森有礼の招聘により商法講習所(一橋大学の前身)の教師として赴任した父とともに、1875(明治8)年に一家で来日し、東京での日々の生活を詳細な日記に残した。1886(明治19)年勝海舟の三男梅太郎と結婚し、6人の子供を産んだ。
- 4) ミスター・ダヴィソン (Mr. Davisson) は函館在住のメソジスト監督派教会派遣宣教師。1878年に来日し、同年から1882年まで北海道教区の長老司の職にあったとともに、1880年から82年まで函館の米国領事を務めた。(克蘭メル 1996: 63)
- 5) メソジスト監督派教会女性海外伝道協会から

- 函館に派遣されたケイト・ウッドワース (Kate Woodworth) とミニー・ハンプトン (Minnie Hampton)。ウッドワースは1883年函館の英国領事ジョン・クイン (John James Quin) と結婚し退職。クインは1889年から長崎の領事となる。(Baker 1896: 428; クランメル 1996: 299)
- 6) 1879年12月の火事で消失した海岸女学校は、銀座三丁目の間借り校舎で授業を続けていたが、1881年9月築地に校舎を再建することができた。(クランメル 1982: 54-55)
- 7) キャロライン・ライト・セミナリー (Caroline Wright Seminary) は1882年にメソジスト監督派教会女性海外伝道協会によって創設された女学校。遺愛女学校の前身。キャロライン・ライトはドイツ駐在米国公使夫人で、長くベルリンに住み社交界で活躍したが、その一方で信仰心も篤く、海外伝道や貧民救済事業に関心を持っていた。自分の趣味としていた手芸によって、女子教育に必要な施設の建設資金を捻出することを計画し、展示会などで得た1800ドルを函館の女学校建設資金として献金した。ミスター・スクワイヤー (Mr. Squire) はミスター・ダヴィソンの横浜転任に伴う後任の宣教師。1881年10月に函館に着任し、1882年から84年まで函館教区の長老司を務めた。(遺愛百年史編集委員会 1987: 29-30; 本多 1994: 74, 112)
- 8) 現小樽市。小田内、穂足内とも書く。地名の由来にはアイヌ語のヲタルナイ (砂の解ける小川の意) による説、ヲタルーナイ (砂路沢の意) による説、オタナイ (砂川の意) による説、オタオルナイ (砂浜の中の川の意) による説などがある。([「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1987: 302])
- 9) クラークはアマースト・カレッジで15年間教授を務めた後、州立マサチューセッツ農科大学長に就任。学長在職のまま1876年6月来日、札幌農学校初代教頭として翌年4月まで滞在した。(内村 1972: 263-264)
- 10) クラークは学生たちに聖書を読ませ、キリストの教えを説いた。そのため1・2期生の中から内村鑑三をはじめとする多数のクリスチャンが誕生し、彼らは後に札幌キリスト教会を結成する。熊本バンド、横浜バンドと並んで札幌バンドと呼ばれ、日本のプロテスタンティズムの源流の一つとなった。(永井・大庭 1999: 43-44)
- 11) 現江別市。津石狩なども書く。地名の由来にはアイヌ語のト・エ・シカリ (沼が・そこで・回るの意) による説、トイシカリ (曲がりくねった川の意) による説がある。([「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1987: 890])
- 12) 馬丁のこと。
- 13) 急峻な坂道を馬がごちない足つきで這い登る姿を描写したものと思われ、イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* にも、似たような表現 (例えば、バード 1973: 352-353) がみられる。

文献

- 青山さゆり会編 1973.『青山女学院史』青山さゆり会。
- 遺愛百年史編集委員会編 1987.『遺愛百年史』遺愛学院。
- 井野瀬久美恵 1998a.『女たちの大英帝国』講談社。
- 井野瀬久美恵 1998b. メアリ・ホールの植民地幻想. 木畑洋一編著『大英帝国と帝国意識 一支配の真相を探る一』149-178. 人文書院。
- 井野瀬久美恵 1999. メアリ・キングズリーの西アフリカの旅 —フィールドワークにおける民族とジェンダー. 栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験 —人類学と歴史学からのアプローチ—』47-76. 人文書院。
- 内村鑑三著、鈴木範久訳 1972.『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』白鳳社。
- [「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1987.『角川日本地名大辞典 1 北海道』角川書店。
- 北村四郎・村田源 1977.『原色日本植物図鑑 草木編 [II]・離弁花類』保育社。
- 北村四郎・村田源・小山鐵夫 1978.『原色日本植物図鑑 草木編 [III]・単子葉類』保育社。
- クランメル, J. W. 著、坂垣哲子訳 1982.『米国メソジスト監督教会等の明治初年における東京の伝道 —1873年から1907年まで—』日本基督教団銀座教会。
- クランメル, J. W. 編 1996.『来日メソジスト宣教師事典 —1873~1993年—』教文館。
- 齋藤元子 1999. 19世紀後半アメリカにおける女

- 性の領域と女性海外伝道運動. お茶の水地理
40 : 33-38.
- 齋藤元子 2000. “アメリカ人女性宣教師の異教地
報告” 研究序説 —Feminist Historiography of
Geographyへの位置付けとして—. お茶の水地
理 41 : 19-24.
- 齋藤元子 2002. 明治初期におけるアメリカ人女
性宣教師の日本報告. 歴史地理学 44-3 : 22-38.
- 永井秀夫・大庭幸生編 1999. 『北海道の百年』山
川出版社.
- バード, I. 著, 高梨憲吉訳 1973. 『日本奥地紀行』
平凡社. (Bird, I. L. 1880. *Unbeaten Tracks in
Japan*. New York : G.P.Putnam's Sons.)
- プランク, M. 著, 鳥海百合子訳 1998. 『東京の白い
天使 —近代日本の社会改革に尽くした女性宣
教師キャロライン・マクドナルド—』教文館.
(Prang, M. 1995. *A Heart at Leisure from Itself* :
Caroline Macdonald of Japan. UBC Press.)
- ホイットニー, C. 著, 一又民子訳 1976. 『クララの
日記』講談社.
- 本多繁 1994. 『続・米国のプロテスタンティズム
と日本人』丸善仙台支店.
- Baker, F. J. 1896. *The story of The Woman's Foreign
Missionary Society of the Methodist Episcopal
Church, 1869-1895*. Cincinnati : Cranston &
Curts.
- Domosh, M., and Seager, J. 2001. *Putting Women in
Place — Feminist Geographers Make Sense of The
World —*. New York : The Guilford Press.
-
- さいとう・もとこ
お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
博士後期課程・比較文化学専攻